課題の引用文について、何度も繰り返し読んでみたのですが、よく意味がわかりませんでした。わかることに関して自分の見解を書いていきたいと思います。

引用文中には、「抑圧が逆圧を生むこと、社会に対する抵抗が時にはーヴァーグナーの場合のようにー力を上昇させること、腕を広げて受け入れてもらうことが芸術家にとって益になるわけでもないこと、これは詳しく論じる必要さえないことである。」とある。「社会に対する抵抗が、時には力を上昇させること」、このフレーズを見たときに、私にはショスタコーヴィチが思い浮かんだ。

1948年に彼が「形式主義者」として共産党によって批判されると、それからというもの、オラトリオ『森の歌』や映画音楽『ベルリン陥落』、カンタータ『我が祖国に太陽は輝く』など、あからさまに共産党を賛美する作品を多数作り、名誉の回復を勝ち得て、また、当局の圧迫・締め付けが和らいだスターリン死後からは、「社会主義リアリズム」の概念にとらわれない近代的で斬新な作風の作品（映画音楽『ハムレット』など）の発表をし、賞賛を受けた。これはある意味で本当に「抑圧が逆圧を生み、社会に対する抵抗が力を上昇させた」のではないかと考えたからだ。彼について考えてみたいと思う。

ショスタコーヴィチが残した音楽のうち、弦楽四重奏曲について考えてみたいと思う。実際、20世紀という時代に15曲も弦楽四重奏曲を書いた大作曲家は他にはいない。以前の作曲家でも、15曲前後あるいはそれ以上書いたのは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ドヴォルザークぐらいしかいないのではないだろうか？しかし、中でも彼の交響曲には特別な背景や思いが込められていると思う。

ショスタコーヴィチは交響曲には、特別な「気」を遣って作曲せざるを得なかったことはよく知られているだろう。「交響曲第2番」、「第3番」はまさにソヴィエトの、共産党のプロパガンダとして作曲されているし、続く「交響曲第4番」は逆に、ソヴィエトの避難に遭ってしまうだろうと、何十年も発表されないままであった。交響曲第5番は、その批判に応えて作られている。このような状況だったからといって、芸術的価値が本当はどうなるということではない。むしろそのために余計素晴らしくなった交響曲もある。ただ、誉められるのも、非難されて、悪くすれば逮捕・粛清されてしまうのも、主に交響曲であったので、良くも悪くも、交響曲はスターリンが死んでからのごく一部の作品を除いて、表向きの顔を持たざるを得なかった。

それに対し、弦楽四重奏曲は、基本的には、「自分と友人達の間の楽しみとして」書かれたため、ずっと自由に、そしてあるものでは内省的に、そしてあるものでは音楽性のみを追求して作曲していたようである。しかし、かといってみんな同じ気分でかかれているかというと決してそうではなく、十五曲が15の個性を持っているので、とても不思議である。ショスタコーヴィチが弦楽四重奏曲に取り組み始めたのは、弦楽四重奏曲第1番でさえ1938年で、交響曲第5番の翌年ということになる。3年前の1935年に、スターリンによる一回目の大きな芸術への干渉、芸術家の迫害そして粛清が始まっている。ということは、弦楽四重奏曲の作曲はこのことと深く関わっているのではないだろうか。

第1番は15分ほどの小曲だが4楽章からなり、後に彼は”少年の頃の少しナイーヴで明るい春の雰囲気”を描いたと述べたそうである。曲は全体的に穏やかで明るく、確かにそういう雰囲気が感じられる。
第二次世界大戦末期の1944年に書かれた弦楽四重奏曲第2番では、雰囲気はがらっと変わり、長調ではあるものの、全体的に暗さが支配している。始まりは荒々しい演奏で始まり、いくつかの変奏ではようやく明るさらしきものが見えてくるが、最後は再び重々しく終わる。
第3番の作曲の後の1948年、スターリンによる2回目の粛清が始まる。第9交響曲などが非難の対象となり、ショスタコーヴィチは公の前で自分の作品の「罪」を告白するといった屈辱を受けるが、辛うじて逮捕までには至らなかった。それでも、音楽学校から解雇され、また作品を演奏する機会などが激減してしまう。しかし、そんな中で書かれた弦楽四重奏曲第4番は、決して悲劇的ではない。第1，第2楽章はこれまでにない不思議な雰囲気で、ユダヤ音楽の影響が指摘されている。これは自分への鼓舞という意味で、そのような内心を反映している曲なのではないかと思う。
1953年の3月、スターリンが亡くなった。いわゆる「雪解け」の時代の始まりである。とはいえ相変わらずソヴィエト共産党政権は健在で、一気にすべてが解決するわけもない。私生活でも妻ニーナや母の死といった不安定な状態が続く。しかしそれでも、それ以降の作品には明らかな雰囲気の違いが表れている。まだ少し自分を抑えなければならないが、自由を少しは謳歌できるのではないか、というわずかな希望がそうさせたのではないか。1956年に書かれた弦楽四重奏曲第6番は4楽章からなり、全体的に明るく、そしてリズミカルな部分が多くある。しかし、所詮ショスタコーヴィチに素直な喜びの歌などはない。いつもどこかにすべて影があり、そして皮肉が混じっていると思う。
1960年に書かれた弦楽四重奏曲第8番は5楽章からなり、「ファシズムと戦争の犠牲者」に捧げられている。第1楽章の先頭からいきなり、特徴ある音型が繰り返し現れるが、これが、DSCH。つまり、「Domitory SCHostakovich」。ドイツ語の表記による自分の頭文字をドイツのルールに従いレ-ミ b-ド-シの音程にした旋律である。まさに、これは作曲者自身の署名のようなものなのだろう。その意味で、ショスタコーヴィチにとって、この四重奏曲には格別の意味が込められているようである。実際に、友人への手紙で「自分への記憶に捧げるものだ」と書いている。私には、「ファシズムと戦争の犠牲者＝自分」という意味も込められているのではないかと思う。それくらい悲劇的な響きが続く曲なのである。DSCHに続く部分は暗くも優しげな旋律が続く。再びDSCHが現れたかと思うと、突然、第2楽章の激しい暴力的な旋律が始まる。凶暴性と緊張感にあふれた音楽である。第3楽章でも激しく厳しい内容続く。中でもチェロの歌は悲しげである。第5楽章ではDSCHが今度は静かに、でもやはり悲しげに再現される。20分ほどの曲だが、とにかく、悲愴感と緊張感に満ちあふれ、あっという間に終わってしまうように思った。
1962年に若いイリーナと出会い、再婚した彼は、1964年に新しい妻に捧げる弦楽四重奏曲第9番を書
いた。久々に長調の曲である。それだけ彼の内心というものが再婚によって変化したということだろうか。

これ以上の曲を考えるのは、長々しくなってしまうので割愛するが、ここまで見てきただけでも、彼の曲に現れる、その時代・状況ごとの背景、内心が聞き取れるだろう。私は、このように、その当時の社会情勢、そのために置かれた自分の社会的状況、またそれらに対する自分の心奥底の感情などが音楽を作る上で大きく作用するのだと思う。そういう経験やそこで得た感情・想い、そういったものを込めてアウトプットする手段、そこに「音楽」というものがあるのだろう。そういう意味では、社会が音楽を作っていると言うこともできるだろう。数々の作曲家が当時の社会を反映している音楽を作る中で、特に、「社会との関わり」の作用を受けていたのがこのショスタコーヴィチなのではないだろうか。彼の場合は、共産党の圧迫によって作風を変えざるを得ない状況になるものの、その中でもソヴィエトに対する自分の感情を曲の所々に散りばめているように思える。特に弦楽四重奏曲には私的な状況の他にも、共産党に対する内心までもが顕著に表れている。そのような、ある意味で生涯の中で二面性を持っていた彼の音楽の真実は、この弦楽四重奏曲に表れているのではないかと思うのだ。そのような意味で、「抑圧が逆圧を生み、また社会に対する抵抗が力を上昇させる」、とは、このショスタコーヴィチのために用意された言葉なのではないか、そう思ったのである。

参考文献

1.「ショスタコーヴィチ大研究」 春秋社
2.「ショスタコーヴィチの証言」 S. ヴォルコフ
中央公論社